



昔の論文を読んで、その時代色をいやおうなく感じさせられることがある。この論文は、いかにも一九五〇年代製らしく、読める。こちらの論文は、たぶん二〇世紀末の仕事だろう。以上のように、その執筆年代がおしはかられる論文は、たくさんある。

ものによつては、どこの大学で勉強をした人の著述なのかも、読みとれる。いわゆる学統の気配がうかがえる論文も、少なくない。いくつかの指標から、そういつたことのわかるケースは、しばしばある。

いっぽんに、研究者の書くものは、真理をめざしていると、考えられている。事実への探求欲だけに、それらはささえられていると、そうみなすのがふつうである。

しかし、多くの論文が、じつさいには時代の型に、論述ぶりを枠どられてきた。たとえば、一九五〇年代の論文は、一九五〇年代のスタイルに、そめあげられている。時代の鑄型からときはなたれた、自由な論文はあまりない。

また、たいていの論文は、大なり小なり学統の感化をうけている。あけすけに書けば、出身ゼミの色をおびているものである。たとえば、そこからの脱出をこころざしていたとしても。

ならば、われわれの書く論文なるものは、総体としてどのような拘束をうけているのか。何にしばられ、研究成果と称される文章は、書きつがれてきたのだろう。私は、そういったことどもが横断的に語りあえる場をもちたいと、ねがつてきた。

二〇一二年度からは、それをつとめ先の国際日本文化研究センターに、もうけている。二〇一六年度までつづいた「人文諸学の科学史的研究」が、それである。この本は、そこをとおして、参加者たちがあらわした報告のまとめに、ほかならない。

じゅうらいの科学史研究は、自然科学がこうむる束縛のありかたを、さぐつてきた。一見、価値中立的にうつる物理や化学も、じつはかくかくの社会情勢にうごかされている。国家の要請や資本からの支援が、こんなふうにからんできた、などなどと。

しかし、人文方面の学問が、そういう俎上にのることは、まずない。分析の対象となるのは、もつぱら自然科学であつた。

科学史の研究者が人文学に目をむけなかつた事情は、わからなくもない。歴史や文学の研究が、しばしば時代の勢いにながされる。社会分析や経済学が、学統に左右されてしまう。そのことを、科学史の研究者たちは、しごくあたりまえの現象として、うけとめてきた。文化系なんて、そもそもそういうものなんだ、と。だから、わざわざ学問の被拘束性を問う氣に、ならなかつたのではないか。

その点で、物理や化学の対象となることもは、社会の枠をこえているように見える。物理の法則や化学反応は、文化のありようにかかわりなく作動する。にもかかわらず、その「真理」へいどむ研究者の姿勢は、社会や文化の拘束をうけてきた。その意外性が、科学史の研究者たちをかりたててきたのだろう。そして、人文諸学には、そういう好奇心をそそる魅力が、なかつたのだと考える。

二〇世紀のなかごろからは、人文系の学問も「人文科学」を自称するようになっていた。「科学」なんだと、おさまりかえつた身振りを、しめしだした。しかし、「人文科学」は、まだ科学史から相手をしてもらえるに、いたっていない。あるいは、「社会科学」でも。やはり、どこかでは見くびられているのだろう。

なるほど、人文学が時流や学統に左右されるのは、不思議でないのかもしれない。研究会での報告を聞いていても、そのことを思い知る。誰もが、つぎのような口調で、発表をしてくれたものである。

あの時代は、みんなああいう方向にながされたんだ。彼は○○先生のところで学んだから、こういう仕事になるのは、やむをえない。以上のように、事態を必然的にながめる発表が、多かつたと思う。物理や化学とは、やはり学説史の論じようがちがつているなと、感じいる。じゅうらいの科学史が、こちらへ目をむけないのもいたしかたないと、思わないではない。

だが、おかげで、人文学の被拘束性は、問いただされなまま放置されやすくなる。これはこれで、こまつたことになるのではなからうか。やはり、学問が何にしばられるのかは、人文系でもはつきりあかされるべきであろう。

この本によせられた諸論考が、人文学の被拘束性総体をつきとめているとは、言えない。それらは、個別分野ごとの諸事情へ、ところどころ光をあてているにとどまる。全体的な展望がえがけているとは、言いきれないだろう。

だが、読めば、さまざまな発見があるのではないか。似たような学問史の展開なら、自分たちの分野にもあつた。あの時代に、こういう議論がわきたつたのは、うちの領域だけでもなかつたんだな、と。そういう掘り起しのひき金役を、この本がはたせればと、今はねがうしだいである。

この本を、私は四部にわけて、構成した。

第一部の諸論考は、明治以後、大日本帝国時代の人文諸学に、むきあつている。そこで成立したある型が、意外にながくたもたれた。あるいは、敗戦後にも尾をひいている様子が、それらを読むと、よくわかる。

第二部のものは、敗戦後の新しい展開を、大なり小なり批判的にふりかえっている。一時代を席捲した国民的

歴史学運動は、どう人文諸学を翻弄したか。あるいは、しなかったか。分野ごとの、もしくは学統による差異などが、うかがえる。

間奏となるコラムをへて、第三部ははじめられる。

私はながらく、明治維新や日本近代の解釈史に、興味をいだいてきた。とりわけ、維新で絶対王政が成立したとする、ひところの通説に関心をよせている。どうして、ああいうおかしい議論がなりたったのかというふうに。

二〇世紀なかごろの学界情勢に、あの説をうかがひあがらせる力学がはたらいた。その作動ぶりを、対談というかたちで、往時の生証人である竹村民郎氏にたずねている。時代が学問をとらえる、そのからくりにせまろうとする試みである。

その前後には、関連する私と竹村氏の論文を、おいている。それぞれに、竹村氏への聞きとりをおぎなう意味で、口はばつたいが益するところはあるう。なお、私はここで書いた文章に、国際的な日本研究への志もふくまれている。ずいぶん肩に力がいっているけれども、何かを感じて下されば、うれしい。

第四部には、私のマニフェストめいた文章を、再録した。ひとつは時代の拘束を論じており、もうひとつは学統のしぼりをとらえている。もうひとつと今のべた文章は、研究会への呼びかけにも利用した。今回論考をよせてくれたのは、これに呼応してくれた研究者たちである。